

第百拾號

中山道鐵道建築著手其他之義井上鐵道
局長ヨリ意見具狀ニ付伺

中山道鐵道幹線工事之儀ニ付テハ既ニ御決定
相成追々準備計畫可致筈ニ候處今般井上鐵
道局長ヨリ高崎ト同時ニ越後直江津ヨリ布設及
ヒ直江津港修築等之儀別紙之通意見書提
出候ニ付篤ト査閱候處其云フ所一々肯綮ニ中リ
實ニ國家經綸ノ要ヲ得タルモノト被存候間更ニ
被盡閣議右意見之通御裁決相成候様致
度此段相伺候也

明治十七年十月廿二日

工部卿山縣有朋

左大臣熾仁親王殿下

伺ノ趣 聞 屈 條 候 経 費 ハ 先 以 幹 線 經 費 ノ 内 ヨリ 支 辨 せ 儀 ト 心 得 へ し

但 費 額 内 譯 及 需 用 期 限 等 ハ 早 一 取

柄 申 出 へ し

明治十八年三月廿八日

中仙道鐵道幹線ノ工事ハ曩キノ具狀ニ悉セシ如ク之ヲ東
西ノ二部ニ分テ其西部ハ既成線路ニ継テ端ヲ大垣ニ發シ東
部モ同シク高崎ニ始メ西端ヨリ相進シテ中央ニ相會スルノ計
畫ニ從フヘキモノトス抑モ鐵道工事ハ先ツ其資用材料搬運
ノ道如何ヲ講シ然ル後事ニ從フノ順序ヲ定ムルヲ重要トス奈
シトナシハ何レノ線路ヲ問ハス必ス先鐵條其他重大ノ物件ヲ搬
致セサルハ敷設其功ヲ奏スル能ハス而シテ其物件ハ必之ヲ海船
ヨリ移搬スルモノトス故ニ舟車交通ノ地ハ數十百里ニ亘テ一時ニ
起スルモ敢テ難シトセスト雖モ若シ峻峻路ヲ遮リ水路又斷
ヘテ脚馬脊ニ藉ラサレハ他ニ轉輸ノ道ナキ處ニ臨メハ端首ヨリ
順次ニ工ヲ施シ且ツ運ヒ且ツ進ムノ方ニ依ラサレハ殆ント將サニ
金銀ヲ以テ軌條ト為カキノ冗費ヲ要セントス今此幹線ハ

兩端幸ニ既成線路ニ藉テ海運ト接スルヲ得ルト雖其中部、
地ハ每ニ丘岳起伏シ水路又全ク断絶ス何ニ由テ資材ヲ搬
運セン是レ此線路ハ專ラ兩端ヨリ相進ンテ中央ニ相會スル
ノ方ニ依ルヘキモノトナス所以ナリ於是部處已ニ定リ得サニ事
ニ此ニ從ハントス然ルニ東部ニ於テ一困難事ノ進路ヲ礙ユルモノ
アリ之レカ救濟ノ策ヲ講セサル可ラス今ヤ線路未擇ノ為幹線
ノ前後左右ヲ通觀スルニ因リテ正ニ其方策ヲ立ルヲ得タリ
依テ左項ニ其困難トスル所以ノ事狀ト之ヲ拯濟スルノ方策
トヲ具シ以テ閣下ノ高裁ヲ仰カントス
抑モ幹線東部ノ工事ハ高崎ヨリ西進スルニ僅ニ十數里ニシ
テ即チ碓氷嶺ニ抵ル此ノ嶺ヤ巍峩盤礴其東麓即チ坂
本邊ヨリ嶺頂ニ達スル僅ニ二三里ニシテ殆ト二千尺ノ高低ヲ爲
シ而シテ嶺頂ニ達スレハ即チ信ノ佐久平ニシテ高原荒々右ハ

淺間嶽ニ連リ左ハ荒船山ニ赴キ前ハ漸次降下スル七八里大屋驛
ニ至テ始メテ止ム迄今小諸等ノ諸驛ハ尚其半腹タリ故ニ其
側面ヲ形容スレハ恰モ曲尺ヲ板上ニ置カ如シ其短勾ハ東面
ニノ長股ハ西面タリ若シ夫レ嶺巖千仞ノ山モ面背ノ麓其
高度均シキハ則チ洞道通ス可ク工事猶施シ易シトス此嶺
ハ之ニ及シ面低背高ニノ縱令洞道ヲ通スルモ洞裏猶峻坂ヲ免
レサレハ只溪澗ニ縁テ千曲百折以テ傾斜ヲ緩フシ一段ハ一段ヨリ
高ク漸ク嶺上ニ達シ然ル後徐次西下スルノ外術ノ施ス可キモ
ノナシ夫レ然リ故ニ之ニ工事ヲ施スハ固ヨリ難ク之カ線路ヲ撰
フ最モ難シトス是ヲ以テ撰線ヨリ工竣ニ至ルマテ無慮六七歳ノ
久ニ弥ラサレハ其功ヲ奏スル能ハサルナリ六七歳漸ク過キ碓氷嶺終
ニ開通ス此ニ叙メテ嶺頭ヨリ西進ノ工ヲ起スヲ得ヘシ是レ他ナシ
物料搬運ノ路碓氷嶺嘗テ之ヲ遮断シ今始メテ開通ヲ得ルニ依

ルナリ其間西部ノ布設ハ勇ヲ鼓シテ東進スト雖亦タ東濃ヨリ
西信ニ連ルノ嶮路ニ扼セラレ容易ニ東部ト連絡ヲ通スルヲ
得ス是ヲ以テ全線竣功ハ尚幾多ノ歲月ヲ費ヤササレハ不
能ナリ工事已ニ難シ歲月又長シ不測ノ變或ハ其間ニ生シ
隨テ費額モ豫算外ニ追送スルヤ不可計是レ勝カ指シテ一
大困難事ト称スル所以ナリ之ヲ如何セハ則チ可ナランカ勝今前
項ニ掲ケシ所ノ方策アリ此策ニシテ先準セラル、ヲ得ハ特ニ拯濟
ノ功ヲ奏スルノミナラス所謂禍ヲ轉シテ福トナスノ類ナラシ故テ
煩繁ヲ顧ミス左ニ之ヲ具供スヘシ
勝巡回シテ越ノ直江津ニ到リ其地勢ヲ熟視スルニ港灣ト称スヘ
キモノニ非ト雖之ニ修築ノ功ヲ施セハ二三ノ巨船ヲ安全ニ繫泊
スルヲ得ヘシ
案スルニ此邊沿海一帶數十里ニ涉リ一モ港灣ト称スヘキモノナ

シ而テ直江津モ固ヨリ山巖ノ屏障トナルモノ有ルニアラス且ツ沙岸
陵夷海水甚淺フメ小艇ノ外ハ里許以内ニ投錨スル能ハス故ニ風
波一タヒ起レハ直チニ拔錨シテ佐渡或ハ七尾ニ逃避スルヲ常トス
汽船ノ如キハ湍泊中毎ニ炭火ヲ想メストエフ如此不便ナルモ猶
高船跡ヲ断タサルモノハ他ナシ左右ニ港灣ト称スヘキモノナラ
且ツ此地ハ東京ヨリ北向一直越海ニ出ルノ衝ニ當リ左右數
十里名邑著馭ヲ扣ヘ所謂四通ノ狀ヲ具ヘ自然陸路轉
輸ノ便ヲ占ルニ依ルナラシ巴ニ地方廳モ茲ニ見ルアリテ此
地ヲ西ニ距ル里余江津ト称スル所ニ一座ノ暗礁アリ岸ヲ距ル
二三百間之ニ據テ長堤ヲ築キ岸ニ扣ヘハ稍風浪ヲ避ル
ヲ得ヘク其懷抱ヲ浚深セハ教般ノ巨船ヲ泊スルニ任ユヘ
シ然ルハ地方ノ便利タル細少ニ非ストシ今方ヤニ其豫測
ニ從事スト聞ク勝カ修築云々ノ言ヲ為スハ固ヨリ之ニ根

基スルナリ幸ニ鐵道ノ布設ニ會セハ此修築ノ益タル更ニ大ナ
ルヘシ故ニ當路者ニ就テ其舉ヲ獎勵セラレシヲ切望スル
所ナリ

因テ來路ヲ回顧スレハ此地ヨリ南向ヲ信ノ長野ヲ經テ上田ニ達
スル三十餘里ハ往々山谷ヲ跋渉シ固ヨリ平易ノ地ニ非ト雖之ヲ
碓嶺等ニ比スレハ難易大ニ懸隔スルモノ有リ且上田ヨリ碓嶺ニ
至ル十數里ハ後々指目ス可キ難場アル無シ若シ此線路ニノ高
岸ト同時ニ布設ヲ起スヲ得ハ材料運搬ハ總テ之ヲ直江津ノ
海運ニ取り先ツ此港ヨリ起テ上田ニ達ス此ノ三十餘里ハ二
三年ヲ期シテ其功ヲ奏スルヲ得ヘシ此ヨリ布設ヲ二手ニ分テ
一手ハ東面シテ碓嶺ニ向ヒ一手ハ西面松本ニ向テ前メハ碓嶺
開通ノ日ハ業已ニ嶺外ノ幹線山嶺頭ニ連テ西ノ方數十里ニ蔓
延シ西部ノ布線ト連絡ヲ通スルノ期ヲ催シ併テ東京灣ト北

海港ト一直運輸ヲ通スルノ利ヲ得ヘシ之ヲ初ヨリ碓嶺ノ一處ヲ苦
守シ漸ク開通スルモ山嶺頭以西ハ依然山路崎嶇ニシテ是レヨリ
鐵路布設ニ着手スルモ其成功ハ尙數歲ノ後ニ非レハ見ル能
ハスト云フニ比スレハ其得失如何ソヤ

又一步ヲ傳メテ上田直江津間運輸ノ景況ヲ觀察スルニ其精
密ノ調査ハ未タ知ル能ハスト雖現ニ目撃スル所ニ依レハ沿道
馬車荷車ノ絡繹櫛比ナルハ頗ル物産流通ヲ証スルニ足ル
ヘシ之ヲ木曾路ノ入馬蕭々稀ニ車跡ヲ見ルモ路難行不
得勇ヲ奮テ僅ニ經過ストモ云如キ情態ニ比スレハ殆ント同日
ノ談ニ非ス殊ニ碓嶺一タヒ通セハ東海ノ貨物日ヲ移サスシテ
北海ニ輸スヲ得ヘク營業上利潤少カラサルハ疑ヲ容レサル所
ニシテ縱令木曾路ノ布設ハ若干遷延ニ付スルモ猶此工事ヲ
速ニスルヲ得策トスヘシ而ルヲ况ンヤ此工事ハ即チ木曾路

ノ切ヲ速成スルノ一大階梯タルニ於テヲヤ

於是反覆尋思スルニ愈上田直江津間ノ布線ハ國家ノ大計ニ
關シ一日モ忽ニス可キモノニ非ルヲ信スルナリ然ルニ幸ナル哉此線
路ハ庶議曩曩キニ民設ノ舉ヲ斥ケテ之ヲ官設ノ部ニ算シ
他年必布設ス可キモノト決セリ已ニ然ラハ只是ニ晚ヲ轉シテ
早トナシ後ヲ進メテ先トナスノハ勝ヤ其職ニ在テ上請セサ
ルヲ得ス庶議亦之ヲ允可セサルヲ得サルモノト信ス伏シ
テ請フ速ニ此線路ノ高等ト同時ニ起工ノ令旨ヲ得ン
ヲ
以上陳叙スル如ク上田直江津間線路ハ該線一已ニ就テ利益
多カルヘキハ暫ク措クモ且ツ幹線布設ニ就キ缺可ラサルノ線
路タリ萬一庶議不得止ノ事故アリテ遽ニ着手シ能ハサル
モノトスレハ碓西幹線ハ依然七八年ノ後ニ非レハ其成功ヲ見

ル可ラス坐シテ此不利ヲ羨ケン歎寧ロ幹線經費中ヨリ若干
ノ資本ヲ捐テ此間ニ假線ヲ敷キ搬路ヲ開テ以テ幹線ノ進歩ヲ
助ルニ若カサルヘシ然ルキハ幹線ニ與フル搬運ノ便利ハ敢テ異
同無シト雖自餘ニ利益スル所莫キヲ以テ其布設經費ハ
全ク幹線ノ負荷スル所トナリ之ヲ直クニ本線ヲ敷クモノニ
比スレハ其裨補幾等ヲ讓ルヘシ加之幹線已ニ成リテ此假
線ヲ廢棄スルノ時ハ或ハ恰モ本線布設ノ時運ニ臨ムモ知
可ラス然ルキハ假ヲ撤シテ真ヲ設ルノ煩冗ヲ取り或ハ短
見ノ唾突ヲ免レサルヘシ
得失已ニ如此ナレハ勝ヤ倍此線路ノ高等ト今時ニ着手セ
ラレント切望ニ堪サルナリ然リ而シテ其經費ハ曾テ概計セ
シ如ク固ヨリ五百万円ヲ要スヘシト雖其給發方ハ目下別途
ニ下付セラル、モ或ハ姑ク幹線經費中ヨリ支辨セラル、モ

都テ敗政ノ宜シトスル所ニ從フヘシ若シ幹線費中ヨリ支辨セ
ラルモトセハ東西西部ノ線路中央ニ相會スルノ前ニ方リ
剩殘幾部ノ工費ニ向テ其費用ノ不足ヲ訴ルニ至ルヘシ此
時ニ方テ其補充ノ金額ヲ別途ニ下付セラルルハ更ニ不可莫
ルヘシ蓋シ其不足金額タルヤ今ヨリ豫メ算ス可ラスト雖其
決シテ上田直江津間ノ經費概計ノ額ニ違セサルヲ信スル
ナリ奈ントナレハ上田直江津間ノ工事ヲ先キニスルヲ以
テ幹線工事上資材搬運ノ便利ヲ得ル細少ニ非レハ或
ハ大ニ其額ヲ減スルモ增高ヲ生スルノ憂ナキハ萬々任保
スル所ナリ右ハ特ニ幹線布設ノ要件タルノミナラス實ニ國
家大計ノ係ル所ト存候間深ク明察ヲ垂ラレ速ニ該線路
起工ノ採可ヲ蒙リ度且ツ直江津港修築之儀者當路
者ニ重議勸奨セラレ度因テ別紙平面概圖相副此段
仰高裁候也

十七年十月十六日

井上鏡道局長

佐々木工部卿殿

高崎大垣及新瀉間
巡田諸道之畧圖

壹葉

このコマには 地図が
ありますから下記の原
本を見て下さい。

請求番号 2A 1 ④ 47

工甲二一九號

明治十七年十月廿五日

大臣



内閣書記官



工部省伺中山道鐵道建築
著手其他ノ義井上鍊道局長ヨリ
意見具狀之件内務大藏兩卿、
御照會按之事

工部省伺中山道鐵道建築着手等ノ義
付意見御尋問ノ趣敬承即チ左ニ意見

陳述候

全國幹道ノ幹線ハ政府ニ於テ敷設ノ廟議確
定ニ高崎以北新潟ニ到ルノ線路及ヒ大垣ヨリ
勢州四日市ニ達スルノ線路ノ如キ何レモ、幹
線ニ缺クヘカウサルノ要線タルヲ以テ之ヲ
官設トシ民設ノ出願ヲ差許サレサリキ然リ
而ノ全國ノ幹線中先ツ中山道ヨリ起工ノコ
トニ決定セラレ其資金ニ充ツル公債モ既ニ
募集セザレタリサレバ起工着手ノ順序及ヒ
便宜ハ主務者タル工部卿ノ撰擇ニ任セラル

キコト當然ナルハニ惟タ其緊要ノ目的ト為
スヘキハ中山道ノ一幹線カメテ迅速ノ竣成
ヲ圖ルコトアルヘキノミ然ルニ碓氷嶺ノ峻難
ノアルアリテ南北ノ海港ニ通スル線路ノ着
手ヲ措キ資金技術ノ全カヲ擧ケテ一ツニ高
崎大垣ノ兩極端ヨリ起工スルモ無慮六七歳
ノ久キニ互ルヘキヲ以テ右兩極端ノ起工ト同
時ニ越後直江津ヨリ起工ニ上田ニ達ニ上田ヨ
リニ手ニ分レ一手ハ東進ニテ碓氷嶺ニ赴キ一手
ハ西進ニテ松本ニ向ニトス要スルニ碓氷嶺ノ
峻難ハ工事ニ實用ニ得ヘキカノ限度ヲ超過
ニテ速成ヲ勉ムルモ事實六七歳ノ久キヲ要
スルカ如シサレバ餘カヲ以テ同時ニ北海ニ達

スル附属線路ヲ起工スル極メテ適當ノ計畫
ナルヘニ就テハ嘗テ議決セシレタル大垣ヨリ
勢州四日市ナリ又ハ尾州半田ナリ南海ニ達
スル附属線モ亦同時若クハ次テ起工セハ全
線ノ竣功自ラ速カナルヘニ
此段上答候也

明治七年十月七日

大藏卿松方正義



内務卿山縣有朋



太政大臣三條實美殿

要

齊

工甲一一九號

十七年

德

藤

明治十八年三月二十三日内閣書記官

第

大臣

内閣書記官

工部省同中山道鐵道建築
著手等井上鐵道局長より意
見具狀之事
右田 謹 供

參議

伊藤

西郷

井上

松本

福岡

大木

出淵

川村

山田

大山

佐木

僅カ如十里ニシテ唯氷嶺ノ峻絶西部ニ東洋ヲ西信
ニ連ル路路ノアルレハナリ故ニ唯西ノ布保ハ七八年ノ後ニ
アツサレ其成切ヲ見ルヘカラス依テ右布保ノ起工ト同時
越後直江津ヲ地工ニ海運ヲ為シ取信ノ上田ニ達シ
之レヲ東西ニ進ントスルキニ有之且直江津港修築ノ
我ハ當路者ニ當ルセラレトノ旨ナリ案スルニ上田直江津
間ノ線路ト雖モ既ニ官設ノ部ニ決セラレ早晚必ス之ヲ布
設セラルヘキモノナレハ本線布設ノ餘カラス此北海達スル
ノ付屬線路ヲ開キ海運ノ便ヲ得トスル極メテ適當ノ
計畫ナルヘリ因テ大蔵方御ノ上右ニ於ルモ是議ヲ付
伺ノ通中先許ノ上該経契概算五百萬圓ハ先以幹線
経契中ヨリ支弁セシメカ又直江津築港ノ後直江津ニ
該地方人民ノ切望シケル鐵道ノ事業ハ官己ニ之ニ當リ特

ニ今収越業中裁可相成取上ハ各地方人民ニ於テハ鐵道
私設ノ資力ヲ得レテ直江津築港ノ事業ヲ負擔スル所ハ
海陸両ナカラ其便ヲ得テ北越地方ノ利ヲ増進スル日
ヲ期シテ候ヘク其道ハ内務卿ヨリ新潟縣令便宣勸奨
誘導ヲ相成義ト爲官左業ヲ具シ仰高裁取也

御指令 按

伺ノ趣聞ニ届カセ候該経契ハ先以幹線経契ノ由
ヨリ支弁取致ト心得レ

但費額由譯及需用期限等ハ早ニ取調申出ヘシ
明治廿一年十月廿一日
官立松本院内務大蔵陸軍ノ三者ニ通解

第二十七號

中山道鐵道線路西起工之儀鐵道局長
井上勝ヨリ意見具狀ニ付伺

中山道鐵道幹線ノ工事ヲ東西二部ニ分テ其東
部ハ碓氷嶺ノ困難アルヲ以テ建築資用ノ材料
搬運ノ便利且將來ノ得失ヲ慮リ上田直江津
間線路布設起工ノ儀客歲十月第百拾號ヲ以
及上請置候處今復々其西部ニ係ル線路撰定
ノ儀別紙ノ通鐵道局長井上勝ヨリ意見書提
出候ニ付篤ト査閱候ニ工事ノ難易運輸ノ便否
ヲ詳論シ其云フ所一々當ヲ得タルモノト被存候
ニ付右意見ノ通名古屋半田間線路布設ノ儀
速ニ御裁決相成度仍テ意見書相添此段相伺
甲三〇